

第六十九回県短歌大会選考結果

特別選「雑詠」

阿木津 英 氏 選

◎天 位

憧れを鴉も抱くかたどたとど夏空へ鳴くカッホーカッホー

青 森 野村優美子

【評】人のものがうらやましいという気持ちはだれもが持つもの。作者はそれをカラスに見て、カッコーのまねをしてたどどしく鳴いているさまにいとおしさを感じている。「カラスよ、おまえもそうかい」というような思いを抱いているところがとてもよい。

◎地 位

化粧塩して串焼きの鮎食ぶ岩木川瀬のしぶき目に顕つ

弘 前 山内 聖子

【評】振った塩が白く浮いた串焼きの鮎は実においしい。この鮎は岩木川の川瀬で捕れたんだなということが、まなうらに顕たってくるようだという。眼前と、鮎の泳いでいる場所。二つの空間を合わせてとてもうまい歌。

◎人 位

特高警察とくかかうに在りしを戦後かたるなき父が遺せる多喜二の書籍

弘 前 澤石扶実子

【評】小林多喜二は特高警察に捕らえられて拷問死した。自分たちはどうして多喜二を拷問死させなければならなかったのか。特高警察だったことを言わなかった父の死後、多喜二の本が見つかり、反省が分かったという歌。

◎秀 逸（5首）

入棺の身支度終へし君にして里の深山に啼く郭公の声

六ヶ所 三戸 源治

日に三度を待みし除雪機 看る夫と手放す赤仔牛あかべこ送るがに佇つ

黒 石 野呂さつよ

牛の出産終えたる午前三時半搾乳までの 仮眠をとれり

十和田 小笠原としゑ

酩酊の亡夫をなじりしたただ一度が残り火のごとく立ち上りたり

弘 前 佐藤 啓子

学校に防犯カメラを置くニュース変わりゆく世相おののきて聞く

十和田 古舘千代志

◎佳 作（20首）

病む父が少年われに賜りし歌は生きゆく力となりき

青 森 山本 透青

風熱く入道雲湧く昼さがり茗荷の香る素麴する

青森 安田 溪子

焦点の合わぬ眼鏡を押し上げて今日も読み継ぐ寺山の短歌

十和田 佐々木愛子

路と茗荷のからみ交ふ根を解し^{ほぐ}るひとりの早旦ほしいままにて

弘前 斉藤 純子

特攻の叔父の名見出づれば立ち竦みたり「平和の礎」は祈りの丘に

青森 ささきせいこ

茗荷の中負けじとどくだみぐんと伸び真白き花を風にゆらせり

十和田 野月 祝子

病む夫は息子の遺影に手を合はすコーヒー供ふる姿小さし

青森 菊地トシエ

再婚の母に伴い転校の子のミニトマトは鉢に萎えゆく

つがる 成田 みつ

夏休みシヤクシヤクくずしたかき氷まつ赤な舌を見せあつた頃

青森 今 貴子

瑠璃色の波間にならぶ石佛の仏ヶ浦は冥土の如し

おいらせ 苫米地昭子

猛暑日のつづく昼餉亡き母にアイスコーヒー入れて供えり

十和田 太田 弘子

バス停に我待つ父の長い影我も又待つ母と成りせば

大鰐 澤 久枝

低米価の今ある暮らし切り詰めて稲見廻りぬ父祖の地なれば

つがる 松橋 孝徳

手に余る箸を洗ひて盆はてし二膳のはしの心許無く

三沢 村岡 幸子

除草剤蒔く手もしばしたためらいぬ蟋蟀の住む叢なれば

弘前 傳法 けい

夕闇のやませ吹く中畔歩く収穫真近かの穂の数見つむ

五所川原 三上 久子

道いっばいにどよめき来たるねぶたの山車「かっぱ」乗せしがわたしは

青森 白戸 杏林

一番 わが問ひに老住職のほほ笑めりお浄土は暑くも寒くもなしと

青森 千葉 禎子

うら盆の墓地に響きてさ緑の新幹線過ぐ高架橋の上^へ

青森 竹洞 早苗

繋がりしフェイスブック誕生日には花束幾つも画面に受け取る

弘前 中村あやめ

宿題 A 「渦」

溜池を気負い下りし春の水ごみに阻まれ堰に渦巻く

鶴田 棟方 文雄

渦潮を恋うか二つの北寄貝夜ふけの厨にしきりつぶやく

十和田 罇 陽子

四億年の時を越え来て今もなほアンモナイトの渦は息づく

つがる 木村 茂子

黒こげの赤児を抱き火の渦中さ迷ふ広島 八月六日

八戸 小間木 玲

今生れしモリアアガヘルのダイビング小さき渦をつぎつぎ重ね

十和田 小山田信子

茄子紺の渦巻きもやうの浴衣着て母の墓前に送り火を焚く

青森 菊地トシエ

亡びては所をかへて渦を巻く阿修羅の流れに散りゆく枯れ葉

青森 齊藤 守

コーヒーにミルクが白く渦を巻きカップの底に沈めた言葉

青森 柴崎 宏子

汗しみる孫とのシャツは洗濯機の中に渦巻き腕をくみたり

十和田 太田 弘子

空爆の母校の跡地で紡ぐ歌火の海の恐怖 胸に渦捲く

六戸 梅村 久子

満開のラベンダー入れ浸る湯にストレスの渦緩みほぐるる

むつ 矢越 朝子

木立 徹氏 選

◎推 薦 (5首)

わが悔いに絡まり解けまたからむ香のけむりの淡き渦巻

七戸 大串 靖子

海色のタオルに包み手渡される渦巻貝のような嬰兒みどりご

青森 今 貴子

月見草の秘めごとを見き渦解きて咲かむ刹那のかそけき身じろぎ

青森 山本 英子

解ける渦生まるる渦に風ひかる鬼怒川溪谷去りがたき昼

五所川原 吉田 勇蔵

やはらかき蔓が渦巻き絡みあひ莢豌豆のいのちふくらむ

青森 千葉 禎子

◎佳 作 (20首)

紛争の止むことのなきこの星を瑠璃に光らせ渦まける海

十和田 中里茉莉子

松の木と馬酔木を結ぶくも一匹渦巻く糸を太らせており

青森 川浪 祐子

争いの渦にまきこむ人のいて気がつけばその真ん中にある

黒石 澁谷 善武

船底の生け簀に餌となる鯛ひかりの渦をちらして泳ぐ

弘前 奈良 弘子

喜んで板木を削ってある志功渦巻く眼鏡の目が笑ってる

青森 白戸 杏林

わたくしの耳に渦巻二つありあなたの声はせせらぎとなる

青森 志村 佳

立佞武多の熱気の渦を抜ければ音なくめぐる星の界あり

つがる 兼平 一子

渦巻もジグザグもなくSEALIDSのデモ過ぎゆけり スマホ片手に

青森 木村 美映

恋色に紅濃く咲ける百日紅 渦まく思ひ人には言はず

弘前 林 昭雄

今生れしモリアラガヘルのダイビング小さき渦をつぎつぎ重ね

十和田 小山田信子

海色のタオルに包み手渡される渦巻貝のような嬰兒

青森 今 貴子

とほからぬ命終諾ふ夫とゐて裡に渦なす言葉つつしむ

弘前 田中 雅子

渦巻もジグザグもなくSEALIDSのデモ過ぎゆけり スマホ片手に

青森 木村 美映

◎佳 作(20首)
伝へ聴く女盗賊石ヶ戸の影を溪流の渦が呑み込む

八戸 木立 徹

渦潮を恋うか二つの北寄貝夜ふけの厨にしきりつぶやく

十和田 罇 陽子

農の不安渦まく胸をみのりたる稲穂の波に打たせてゐたり

つがる 中村 雅之

茄子紺の渦巻きもやうの浴衣着て母の墓前に送り火を焚く

青森 菊地トシエ

請願の意味を噛みしめ署名せり大きな渦になるを期しつつ

青森 風張 景一

亡びては所をかへて渦を巻く阿修羅の流れに散りゆく枯れ葉

青森 齊藤 守

山本英子氏 選

◎推 薦(5首)

積み返す堆肥の湯気のほんのりと渦巻きのぼるも農の見納め

黒石 摺 祐太郎

渦巻き傘を回して手踊りの子等一斉に向きを変えたり

五所川原 野呂 富枝

コーヒーにミルクが白く渦を巻きカップの底に沈めた言葉

青 森 柴崎 宏子

目を閉じて朝日浴びつつ太極拳その子は胸の渦を明かさず

青 森 田中百合子

夢みえぬ戦さの渦の少女の日 祖母の小豆粥温く残りぬ

黒 石 野呂さつよ

ゆるやかな渦に巻かれる心地してワルツのステップにわれも乗りゆく

十和田 生出 穎子

田の水を一気に放てば渦をまき息を吐くごと勢いはしる

十和田 田畑 律子

渦巻きの蚊取り線香ぶら下げて木を伐る男ら夏山に入る

青 森 三嶋じゅん子

船底の生け簀に餌となる鯛ひかりの渦をちらして泳ぐ

弘 前 奈良 弘子

喜んで板木を削ってある志功渦巻く眼鏡の目が笑ってる

青 森 白戸 杏林

わたくしの耳に渦巻二つありあなたの声はせせらぎとなる

青 森 志村 佳

立佞武多の熱気の渦を抜けくれば音なくめぐる星の界あり

つがる 兼平 一子

やはらかき蔓が渦巻き絡みあひ莢豌豆のいのちふくらむ

青 森 千葉 禎子

どん底の渦中に在るもわが畑に來れば野菜のとりどりの花

弘 前 中村あやめ

恋色に紅濃く咲ける百日紅 渦まく思ひ人には言へず

弘 前 林 昭雄

藤田久美子氏選

◎推 薦(5首)

ラストランサッカーボール蹴りあげて歓喜渦巻く逆転ボール

青 森 新山 魏一

四億年の時を越えて今もなほアンモナイトの渦は息づく

つがる 木村 茂子

今生れしモリアアガヘルのダイビング小さき渦をつぎつぎ重ね

十和田 小山田信子

請願の意味を噛みしめ署名せり大きな渦になるを期しつつ

青 森 風張 景一

渦巻きの傘を回して手踊りの子等一斉に向きを変えたり

五所川原 野呂 富枝

◎佳 作 (20首)

大雨のつづきて渦まく橋の下「軽トラ」一流流されてゆく

十和田 関川八重子

ただならぬ渦まきに巻く八月のいま反戦の短歌はあふれて

むつ 立花 恵子

滑覧この雑草を挽ぎ取らむ猛暑の畑に闘志渦巻く

六戸 梅村 久子

つがる 成田 みつ

解ける渦生まるる渦に風ひかる鬼怒川溪谷去りがたき昼

ゴマ塩の頭頂に二つ渦を巻くつむじ危ぶむ「安保法案」

五所川原 吉田 勇蔵

青 森 尾野 黎司

渦巻きの蚊取り線香ぶら下げて木を伐る男ら夏山に入る

亡びては所をかへて渦を巻く阿修羅の流れに散りゆく枯れ葉

青 森 三嶋じゅん子

青 森 齊藤 守

喜んで板木を削ってゐる志功渦巻く眼鏡の目が笑ってる

とほからぬ命終諾ふ夫とゐて裡に渦なす言葉つつしむ

青 森 白戸 杏林

弘 前 田中 雅子

わたくしの耳に渦巻二つありあなたの声はせせらぎとなる

コーヒーにミルクが白く渦を巻きカップの底に沈めた言葉

青 森 志村 佳

青 森 柴崎 宏子

行き違ひ振れし親子の渦中より身を退き母なる矜恃を保つ

合憲と言ひし総理に見えないか不戦を願う人人の渦

弘 前 澤石扶実子

む つ 吉田 章子

やはらかき蔓が渦巻き絡みあひ莢豌豆のいのちふくらむ

偏見値上げてブレズレ捲りをり渦巻く驕り止むを知らずや

青 森 千葉 禎子

佐 井 渡邊 寂隆

砂の渦を小さき指もてつぎつぎと襲ふわが娘は蟻地獄地獄

こすもすの揺れる小道をただ歩く渦巻く鬱にのみ込まれぬよう

黒 石 島田 興三

八 戸 松尾 タイ

宿題 B 「胸」

◎佳 作 (20首)

胸の内告げたら君も領いて満月まぶし二十歳のふる里

五所川原 菊地 美絵

遠き日に言葉のこせし彼の人の少年のまま わが胸にすむ

十和田 罇 陽子

親よりも先に逝くなど胸を病むわが手をつつみくれし父思ふ

青森 安田 溪子

胸元をぽんと叩きて襟直し背筋伸ばして舞台に向ふ

青森 濫田 紀子

幼な児を胸に抱きて安本法反対のデモに若きら連なる

十和田 野月 祝子

太鼓たたたく一群の中の吾が幼探せし時の 胸の高鳴り

弘前 山内 悦子

敗戦の悲惨語れず胸に秘め短歌のちからで今詠みをりぬ

青森 寺澤 武麿

初出勤屈託もなくピアス付け胸膨らませ孫の出で行けり

六ヶ所 三戸 源治

ふたたびは帰れぬ道か胸おもく施設へ惚けし母の手をひく

青森 齊藤 守

秒針の刻む黙禱 ザックザックと軍靴の音の胸に迫り来

青森 今 貴子

千田節生氏 選

◎推 薦 (5首)

いつせいに胸の団扇が動きだす取組ひとつ終はりし度に

八戸 小間木 玲

胸元にずばつと食い込む一球にのけぞる打者は投手を睨む

青森 泉 正彦

顔を見ず異常なしを告げる医師 でもわたくしは胸がいたいです

むつ 吉田 章子

胸の内語れる友のひとり居て亡夫にかわりて手を引き呉れる

弘前 傳法 けい

胸元のライン意識し斜め横に鏡にポーズワンピースのわれ

弘前 中村あやめ

胸に響く古いし被爆者の枯れた声八月六日の広島朝

弘前 永井 怜

山谷久子氏選

◎推 薦（5首）

朝つゆに靴をぬらしてウオーキング胸はりてゆく今日のはじまり

十和田 小笠原康子

胸にある母の言葉はいつにても吾を救ひぬ介護の今も

弘前 山内 聖子

明治生まれの父の形見のペンダント真つ赤な珊瑚わが胸に揺る

十和田 大野あつ子

大鼓たたく一群の中の吾が幼探せし時の 胸の高鳴り

弘前 山内 悦子

立佞武多・笛・鉦・太鼓近づけば我が古いの胸高鳴りて止まず

つがる 松橋 孝徳

「また来てね」姉に癒ゆる兆しなく胸に重石を抱きて帰る

つがる 成田 みつ

七回忌過ぎて今なほ埋火の胸につかえし父の横顔

三沢 村岡 幸子

ふたたびは帰れぬ道か胸おもく施設へ惚けし母の手をひく

青森 齊藤 守

「胸に手を当てる考えてごらんさい」廊下にシュンと昭和の子供

弘前 赤坂千賀子

耳ぞこにねぶた囃子の余韻ゆれ路地裏帰る胸の虚しさ

弘前 林 昭雄

湖の蒼空の青さに胸がすく喜寿を祝ひし遊覧船に

青森 三浦美英子

◎佳 作（20首）

不覚にも質したきこと言わぬまま全てを胸に畳んで辞する

青森 三嶋じゅん子

親よりも先に逝くなど胸を病むわが手をつつみくれし父思ふ

青森 安田 溪子

延命治療拒みしあなた 胸底にいまだ問う「あれで良かったですか」

青森 蛭名 洋子

父われを理解せぬ子か言ひさしてつぐみたる胸の内に何ある

青森 風張 景一

「本当に怖いのはあなたの胸の中」怪談役者がとつとつ語る

青森 千葉 禎子

顔を見ず異常なしを告げる医師 でもわたくしは胸がいたいです

むつ 吉田 章子

胸に響く古いし被爆者の枯れた声八月六日の広島朝

弘前 永井 怜

主治医より病状の経過聞きをりて胸に秘めつつ夫に寄り添ふ

青森 大里 啓子

朝つゆに靴をぬらしてウオーキング胸はりてゆく今日のはじまり

十和田 小笠原康子

妹が手帳に遺しし葬儀手順母には見せず胸に納める

むつ 立花 恵子

ねぶた運行の花火鳴りたりわが街の平和を長く胸にとどめぬ

弘前 須藤まさえ

孤独なる父に応へてやれぬ時わが胸奥に痛み残れり

むつ 矢越 朝子

七回忌過ぎて今なほ埋火の胸につかえし父の横顔

三沢 村岡 幸子

胸の内語れる友のひとり居て亡夫にかわりて手を引き呉れる

弘前 傳法 けい

遠泳の海より出でて輝ける子の胸板の厚くなりたり

三沢 阿久津凍河

「胸に手を当てて考えてごらんさい」廊下にシュンと昭和の子供

弘前 赤坂千賀子

何かなし胸に望みの生まれたり拍手の中に「王将」唄ふ

五所川原 吉田 勇蔵

湖の蒼空の青さに胸がすく喜寿を祝ひし遊覧船に

青森 三浦美英子

不覚にも質したきこと言わぬまま全てを胸に畳んで辞する

青森 三嶋じゅん子

延命治療拒みしあなた 胸底にいまだ問う「あれで良かったですか」

青森 蛭名 洋子

抱っこひも胸処に然とみどり児を目交ひ凜し父なる青年

弘前 澤石扶実子

芽吹きゆく命のかたちの慰霊塔 閑上の旅の胸にしまへり

つがる 兼平 一子

久々の郷里の駅に帰り来て稲田のかをり胸に吸ひ込む

平川 工藤 チエ

平井軍治氏選

◎推 薦 (5首)

何気なく夫の笑ひの零れ出で小さきわが胸はつかに啖るる

青森 宮川 雅子

胸骨を二本剪りて摘出す肺に育ちし寄生木の癌

南部 八木田順峰

凧待ちて鳴る腕摩り胸算用意気盛んなり海の猛者等は

佐井 渡邊 寂隆

遠泳の海より出でて輝ける子の胸板の厚くなりたり

三沢 阿久津凍河

おほらかに明るくあれとわが胸の扉をたたく志功の女神

弘前 中村 キネ

母の胸母乳溢れて吸ひつきし妹あなたに出逢へたあの日

青森 太田恵美子

◎佳 作(20首)

胸の内告げたら君も頷いて満月まぶし二十歳のふる里

五所川原 菊地 美絵

胸元にずばっと食い込む一球にのけぞる打者は投手を睨む

青森 泉 正彦

ことばなき母の言ひたき胸のうち写る魔法の鏡がほしと

中泊 宮越恵美子

顔を見ず異常なしを告げる医師 でもわたくしは胸がいたいです

むつ 吉田 章子

朝つゆに靴をぬらしてウオーキング胸はりてゆく今日のはじまり

十和田 小笠原康子

遠き日に言葉のこせし彼の人の少年のまま わが胸にすむ

十和田 樽 陽子

真白きさらしを胸に巻き上げてよさこいソーラン意気高まれり

十和田 音道美保子

若き日の白き残影今もあり胸部写真に薄ら氷のごと

青森 間山 淑子

微かなる胸の膨み隠し持ち夏の少女はバアバアのもとへ

大鰐 澤 久枝

時速四十^{キロ}籽避難域通過の被曝量 胸部^{エックス}X線の五十分の一とや

弘前 岩間 甫

友の忌が胸を占めたる一日なり凌霄花の朱が目に沁む

むつ 高橋やす子

悲しみはシュレッターにきざみ喜びはわが胸奥にひそませおかん

十和田 佐々木せつ子

胸の内語れる友のひとり居て亡夫にかわりて手を引き呉れる

弘前 傳法 けい

早世の母亡きあとの夕餉時思ひを胸にそれぞれ無口

野辺地 作田 サキ

人間の生き難き世を家鳩は自由自在に胸張りて棲む

青森 今井 邦子

いつせいに胸の団扇が動きだす取組ひとつ終はりし度に

八戸 小間木 玲

胸の鼓動気づかれぬよう腕を組みバッテリーボックス唯に見守る

青森 大坂 克子

胸合はせ抱けるシーンの田んぼアート「風と共に去りぬ」に息のむ

弘前 菊池みのり

戦争をゆるすなりゆき胸あつくおそれて思う繰り返へさぬか

十和田 古舘千代志

席題「歌」

◎秀 逸（5首）

紅葉の溪たゆく舟の船頭の貌鼻追分空へぬけゆく

十和田 佐々木せつ子

するすると思へが言葉に変わる時一首がすくつと立ちあがるなり

十和田 宮原 久美

君の目の奥にあるもの見えぬまま昨日も今日も君の歌詠む

田舎館 佐々木鶴池子

八十路超えし身はかすかなる痛みあれど草抜きをれば歌ひとつ成る

弘 前 須藤まさえ

今もなほ昭和の歌の聞こえるオルゴールの振ぬ子巻きて仲秋

三 沢 阿久津凍河

三川 博氏 選

◎推 薦（3首）

・天 位

この夏に孫をなくしたわが妻は「いつでも夢を」をこの頃歌ふ

黒 石 島田 興三

・地 位

歌好きな父のおはこの山唄に合わせてりんごを挽ぎし日遙か

青 森 川浪 祐子

・人 位

病む夫の快癒祈りつ歌詠めばやさしく笑みて大きくうなづく

青 森 菊地トシエ

席題「歌」

◎佳 作（15首）

少年の胸に残りし父の歌「寂しさに耐へ強く生きよ」と

青 森 山本 透青

難民のシリアの子らのうたひるし平和の歌を知ることもし

つがる 中村 雅之

落ち込めば啄木歌集出して読む心に沁みて解り易き歌

十和田 小山田信子

「マッチする…」歌たどりつつゆく小径修司の気配に秋風わたる

十和田 野月 祝子

息絶へし母の御霊に捧げむと憊こむるひばりの歌聴かせやる

六ヶ所 三戸 源治

工藤せい子氏選

◎推 薦 (3首)

・天位

送られし「悠」の歌集にしのびたりK先生のやさしき面輪

五所川原 奥山 圭子

「流浪の民」歌ひし少女の影が踵つ還らぬ拉致の海はるかなり

青森 齊藤 守

・地位

FMにグレゴリオ聖歌聞く朝空あしたつぼの心が満たされていく

青森 今 貴子

悩み多き口には出せぬ来し方を短歌うたのちからでいま詠みをりぬ

青森 寺澤 武麿

人生という大海を進み行く短歌ひとつを羅針盤とし

青森 柴崎 宏子

「流浪の民」歌ひし少女の影が踵つ還らぬ拉致の海はるかなり

青森 佐藤 しげ

青森 齊藤 守

長き訴へ述べゆくやうに歌ふラップ窓辺の少年らに夏休み了ゆ

黒石 野呂さつよ

◎秀 逸 (5首)

友の歌ふ「城ヶ島の雨」聞きながら友と出会ひしころを思へり

十和田 大野あつ子

ながらへて今年も参加の短歌大会席題「歌」にはたと困りぬ

弘前 岩間 甫

水色のときをさ迷い朝顔はあさ陽ひに向きて歌い始むる

十和田 田村 郁子

黒揚羽青みを帯びて行き来する本のかたちの修司の歌碑を

南部 八木田順峰

一人聴く好きな歌声どんなにか私は私にもどれただろう

青森 野村優美子

何百人歌ふがごとく声合はせ天守曳き屋の今し始まる

弘前 横山 祥子

師の詠みし心ゆさぶる歌に遭いわが人生は流れを変えぬ

十和田 古舘千代志

師の詠みし心ゆさぶる歌に遭いわが人生は流れを変えぬ

十和田 古舘千代志

歌うごと安法案反対と叫ぶ人らを胸熱くみる

青森 三嶋じゅん子

廃炉への道程みちのりとほきフクシマに向かひて「希望」の歌を届けむ

青森 佐藤 しげ

◎佳 作(15首)

村の碑にコスモス飾り学童ら歌いつつ行く放課後の道

鶴田 棟方 文雄

君の目の奥にあるもの見えぬまま昨日も今日も君の歌詠む

田舎館 佐々木鶴池子

記紀歌謡よりの伝承受け継ぎてわが反戦を歌にたくさむ

弘前 藤田久美子

モッコ来るといふ子守歌耳底にありて訪なう亡母の故郷

むつ 高橋やす子

助詞一つ決まりし歌を声出してよめばやうやくリズムととのふ

青森 安田 溪子

歌好きな父のおはこの山唄に合せてりんごを挽ぎし日遙か

つがる 松橋 孝徳

老いてなほ三十一文字を友として創り歌へばこの世は愉し

黒石 摺 祐太郎

厨辺ひとよに一生を拠りし母なりき 籠かごの鳥とり なぞ鼻唄まじりに

青森 川浪 祐子

寡黙なる弟なれど思いがけず矢沢永吉となりて歌う夜

弘前 山内 悦子

弘前 澤石扶実子

廃れゆく童謡唱歌を惜しみつつ思いを込めてハーモニカ吹く

青森 泉 正彦

加藤捷三氏選

ひとの歌ただ棒読みに読みくだすふかきころにいたらぬさむさ

青森 尾野 黎司

◎推 薦(3首)

村の碑にコスモス飾り学童ら歌いつつ行く放課後の道

明日を征く「われのほころび縫ふ母」と歌ひし学徒に今の世を詫ぶ

弘前 田中 雅子

鶴田 棟方 文雄

清教徒のARIAを歌う姪の声喜ぶ亡母はの姿浮かびぬ

深浦 佐藤 宏子

歌うごと安法案反対と叫ぶ人らを胸熱くみる

青森 三嶋じゅん子

・人位

難民のシリアの子らのうたひるし平和の歌を知ることもし

つがる 中村 雅之

子守唄出尽くしたれば不意に立ち軍歌唄ひだす父のまぼろし

八戸 小間木 玲

「冗談たい」九州生まれの若き歌手笑ひ広がる方言ひとつ

青 森 太田恵美子

悩み多き口には出せぬ来し方を短歌のちからでいま詠みをりぬ

青 森 寺澤 武麿

◎秀 逸（5首）

幾百人の力曳き合う弘前城歌うごとくに時間のきしみぬ

十和田 中里茉莉子

「流浪の民」歌ひし少女の影が踵つ還らぬ拉致の海はるかなり

青 森 齊藤 守

黒揚羽青みを帯びて行き来する本のかたちの修司の歌碑を

南部 八木田順峰

廃炉への道程とほきフクシマに向かひて「希望」の歌を届けむ

青 森 佐藤 しげ

晩夏光蟬の鳴き声美しく最後のいのち余韻の歌よ

青 森 新山 魏一

八十路超えし身はかすかなる痛みあれど草抜きをれば歌ひとつ成る

遠くより歌聴こえをり仲秋の埠頭に円き月はのぼりて

青 森 木村 美映

歌好きな父のおはこの山唄に合わせてりんごを挽ぎし日遙か

「アナと雪の女王」を歌ふ六歳のやさしき声よ 秋桜ゆれる

むつ 立花 恵子

今もなほ昭和の歌の聞こえるオルゴールの振子巻きて仲秋

三 沢 阿久津凍河

同窓会元カレ追って二次会へウエスト絞りドリカム歌う

青 森 郷 佳南

◎佳 作（15首）

歌詠しこの喜びは老いてこそ何にも優る生甲斐となる

青 森 柿崎 エミ

心の闇歌に放ちて二十年仄かに明るむのこりの時間

青 森 大坂 克子

助詞一つ決まりし歌を声出してよめばやうやくリズムととのふ

青 森 安田 溪子

夫逝きて一人の夜を歌よみぬ流れる涙に癒やされて生く

十和田 福井 詳子

この夏に孫をなくしたわが妻は「いつでも夢を」をこの頃歌ふ

黒石 島田 興三

師の詠みし心ゆさぶる歌に遭いわが人生は流れを変えぬ

十和田 古舘千代志

助詞一つ決まりし歌を声出してよめばやうやくリズムととのふ

青森 安田 溪子

臥しがちの父を皇居の歌会に連れて行くわと歌を始めき

青森 高橋 圭子

立佞武多最終日なり郷思ふ吉幾三の歌声盛る

つがる 松橋 孝徳

意に染まぬ時は聞こえぬふりをして鼻歌一つ卒寿の母は

三沢 村岡 幸子

山下正義氏 選

◎推 薦 (3首)

・天 位

八十路超えし身はかすかなる痛みあれど草抜きをれば歌ひとつ成る

弘 前 須藤まさえ

◎佳 作 (15首)

子守唄出尽くしたれば不意に立ち軍歌唄ひだす父のまぼろし

八戸 小間木 玲

・地 位

厨辺に一生を扱^{ひとよ}りし母なりき 籠の鳥 〴〵 ぞ鼻唄まじりに

弘 前 澤石扶実子

ある年の家族新年歌の会親子四人の「めんこい子馬」

青森 宮川 雅子

廃れゆく童謡唱歌を惜しみつつ思いを込めてハーモニカ吹く

青森 泉 正彦

・人 位

短歌など作らず幸せになれといふ言葉の時にはかなく浮かぶ

青森 竹洞 早苗

国体の開会式も様変わり君が代歌うは五人のイケメン

青森 佐藤 東

◎秀 逸 (5首)

幾百人の力曳き合う弘前城歌うごとくに時間のきしみぬ

十和田 中里茉莉子

するすると思へが言葉に変わる時一首がすくつと立ちあがるなり

十和田 宮原 久美

青森 今 貴子

我が歌は未だ至らず苦しきも楽しみもありいつか来る日に

弘前 永井 怜

君の目の奥にあるもの見えぬまま昨日も今日も君の歌詠む

田舎館 佐々木鶴池子

定年の夫との時間増えたれば歌くちずさむを忘れをりたり

むつ 矢越 朝子

歌好きな父のおはこの山唄に合わせてりんごを挽ぎし日遙か

青森 川浪 祐子

壱岐の島折口信夫の歌碑にふれ図書館で知る偉大な歌人と

青森 三浦美英子

何百人歌ふがごとく声合はせ天守曳き屋の今し始まる

弘前 横山 祥子

歌うごとと安保法案反対と叫ぶ人らを胸熱くみる

青森 三嶋じゅん子

廃屋のやねに鴉の一羽ゐて（歌を詠めよ）とふた声なきぬ

五所川原 山谷 久子

みどりごをあやす女の歌ふうた羽毛のやうに陽だまりのやうに

平川 福士 りか